

関西学院大学博物館所蔵「貼交屏風」について

——青木嵩山堂の木版画を踏まえて——

原 山 詠 子

一 はじめに

関西学院大学博物館が所蔵する屏風作品に、木版画が貼り交ぜられた六曲一隻の「貼交屏風」(以下、本屏風)がある。【図1】

本屏風には、花鳥画や山水画をテーマにした木版画が各扇に三枚ないし八枚ずつ貼付されており、全体で三十三枚が確認できる。これらは、明治十三年(一八八〇)頃から大阪で活躍した出版社青木嵩山堂(以下、嵩山堂)の木版による「美術画譜」と「摸古美術画」と見られる。

本稿では、令和三年(二〇二二)に実施された本屏風の作品調査概要を報告し、嵩山堂の木版画を踏まえながら本屏風について紹介したい。

二 作品概要

本屏風は、総体一七三・三×三六七・〇cmの六曲一隻で、各扇に一五

九・四×五五・四cmの台紙をつけて木版画を貼付している。尾背周辺の虫損や台紙の浮きなど、取り扱いや保存に際して注意を要する箇所があるものの、木版画の状態は概ね良好である。貼付された木版画の判型は四種類あり、縦に細長い判型(柱型)は約四六・〇×十七・二cm、中型の判型で画面を縦に用いた判型(中型〔縦〕)、約三三・〇×十七・〇cm)と横に用いた判型(中型〔横〕、約十七・〇×二三・〇cm)は、柱型の半分の大きさである。最も大きい判型(大型)は約七五・五×三六・八cmで、浮世絵では類を見ない巨大な木版画といえる。柱型や中型についても浮世絵の一般的な判型とは異なり、中型はむしろB4(二五・七×十八・二cm)サイズに近い。

これらの大半は花鳥画をテーマにしており、呉春の署名と印があるものに限っては山水画がテーマとなっている。いずれの木版画も、浮世絵でよく見られる花鳥画や山水画の表現とは異なり、輪郭線がほとんど用いられていない。やわらかな筆跡や立体的な彩色がほかし摺りによって巧みに再現されており、肉筆画のような風合いが感じられる。特に、向



【図1】「貼交屏風」(六曲一隻、関西学院大学博物館所蔵)

かつて右から第一扇・第三扇・第五扇に貼付された大型の木版画三枚は多くの色版を重ねたたいへん豪華なつくりである。柱型や中型には見られない摺りの技法も見られ、花脈や鳥の羽毛部分は濃く溶いた顔料によって摺り出されている。これによって生じた色面の立体感が花鳥をいつそう生き生きと見せているのである。

また、全ての木版画には絵師の署名と印章があり、九名の名前が確認できる。最も多いのは呉春(一七五二〜一八一二)で十三枚、次いで狩野常信(一六三六〜一七一三)が十二枚、松村景文(一七七九〜一八四三)が二枚、その他、与謝蕪村(一七二六〜一八四四)、円山応挙(一七三三〜一九五)、長沢芦雪(一七五四〜九九)、椿椿山(一八〇一〜五四)、望月玉泉(一八三四〜一九一三)、今尾景年(一八四五〜一九二四)が一枚ずつ確認できる。

京都画壇の絵師が多く浮世絵師の名前は見られない点、先述した判型や表現の違い、版元を示す極印や届印が画中に見られないことから、花鳥画や風景画をテーマにした一般的な浮世絵とは別の制作環境や時代背景を想定する必要がある。ここで考えられるのが、高山堂から出版された木版画、「美術画譜」と「摸古美術画」である。

二二 高山堂について

高山堂は明治十三年〜大正七年(一八八〇〜一九一八)に大阪で活動した総合出版社である¹⁾。青木恒三郎(一八六三〜一九二六)が一代で

立ち上げ、心齋橋筋北詰周辺で店舗の移転を繰り返しながら営業した。幅広い分野の出版物を取り扱っており、中でも美術関連の出版物は、明治十八年（一八八五）に銅版画の『世界旅行万国名所図絵』と『内国旅行日本名所図絵』、同二十四年（一八九二）に木版口絵と表紙絵を伴う文芸小説、そして同二十五年（一八九二）に木版画による美術画譜を出版して評判を得た。

この美術画譜は一組十二枚入りの袋入り木版画集で、古画の写しや當時活躍していた絵師に書き下ろしてもらった絵を、テーマ、時代、絵師別にまとめている。かなり力を入れた出版企画だったようで、明治二十五～七年のわずか三年間で四十冊以上の美術画譜が制作された。このうち半数は、絵師の福井月斎（一八五二～一九三五）が編集や縮画を担当している。月斎は本名を金次郎といい、江戸で生まれ、京都に移った後に狩野永祥（一八一〇～八六）に師事した。恒三郎と懇意であった月斎は、京都から嵩山堂が店を構える大阪市東区博労町へ転居して美術画譜の仕事をしたという。

なお、嵩山堂は、大正二年（一九一三）頃から同七年の廃業までに、創業当初から相互販売関係にあった芸艸堂に版權、版木、美術書等を譲渡している。美術画譜や摸古美術画も芸艸堂で再版されており、その際、表紙や奥付等の表記は芸艸堂の名前に改められた。そのため、これらの木版画には、嵩山堂版と芸艸堂版の二種類が存在する。現在各所で所蔵されている美術画譜を確認すると、各図の周囲の余白に朱書きがあり、画譜のタイトル、出版年、出版人等が明記されている。本屏風の木

版画は図の周囲がトリミングされておりこれらの情報が不明であるが、次章では企画元である嵩山堂の美術画譜と摸古美術画を踏まえながら整理しておきたい。

四 本屏風の木版画

（一）美術画譜

嵩山堂が明治十八年から毎月発行していた販売目録『内外書籍出版発兌目録』（以下、嵩山堂目録^②）に「高尚優美美術画譜出版広告」と題した次のような広告がある。「特ニ優美ナル古画逸品ヲ選択シ大ニ新意匠新考案ヲ凝ラシ茲ニ袋入画譜ヲ出版ス（中略）殊ニ屏風襖等ノ張交ニ用ヒテ体裁善ク寔ニ高尚ニシテ優美ナリ」。この宣伝文句により、美術画譜が、まさに本屏風のような用いられ方を想定してつくられた商品だったことが判明する。

そこで、現存する美術画譜の図様を基に確認すると、本屏風に貼付された木版画は、「景文花鳥画譜 後編」「狩野常信花鳥画譜 前編」「呉春山水画譜 後編」「中古諸名家画譜」と題された美術画譜であることがわかる。【表一】

「景文花鳥画譜」は明治二十五年に出版され、同年に後編と続編が出た。嵩山堂目録によると売価は「實價金三十五錢 郵税二錢」とある。本屏風には、後編の十二図のうち「鴉に蘆」と題された一図のみが貼付されている。なお、摺られた時期が異なるためか、同じ図様で印章が異

【表1】「貼交屏風」木版画一覧

	画題	絵師	署名と印章	版型	所収の画譜（出版年）
第一扇	蓬莱山之図	呉春	呉春「呉春之印」（白文方印）	柱	中古諸名家画譜（明治26年）
	藤花に群雀之図	長澤芦雪	蘆雪「長澤」「魚」（朱文楕円連印）	柱	中古諸名家画譜（明治26年）
	四季花鳥之図 秋之部	望月玉泉	玉泉「玉泉」（朱文連印）	大	—
第二扇	日の出飛鶴之図	狩野常信	常信筆「常信」（朱文壺印）	中（縦）	常信花鳥画譜前編（明治26年）
	蓬莱山之図	呉春	呉春「呉春」（朱文連印）	中（横）	呉春山水画譜後編（明治26年）
	春日耕作之図	呉春	呉春「呉春」（朱文連印）	中（横）	呉春山水画譜後編（明治26年）
	夏山飛燕之図	狩野常信	常信筆「狩野」（朱文方印）「常信」（朱文方印）	中（縦）	常信花鳥画譜前編（明治26年）
	春谿雄雉之図	狩野常信	常信筆「狩野」（朱文方印）「常信」（朱文方印）	中（縦）	常信花鳥画譜前編（明治26年）
	秋風曉来之図	呉春	呉春「呉春」（朱文連印）	中（横）	呉春山水画譜後編（明治26年）
	雨中山路之図	呉春	呉春「呉春」（朱文連印）	中（横）	呉春山水画譜後編（明治26年）
	老松に山鶴之図	狩野常信	常信筆「常信」（朱文瓢印）	中（縦）	常信花鳥画譜前編（明治26年）
第三扇	桃花錦鳩之図	椿椿山	癸丑小春仿宋人畵意 平弼「椿山」（朱文円印）	柱	中古諸名家画譜（明治26年）
	花卉に蝶之図	松村景文	景文「景文印」（白文方印）	柱	中古諸名家画譜（明治26年）
	四季花鳥之図 冬之部	今尾景年	景年「今歎」（白文方印）「景年」（朱文方印）	大	—
第四扇	白尾孔雀之図	狩野常信	常信筆「常信」（朱文壺印）	中（縦）	常信花鳥画譜前編（明治26年）
	溪間避暑之図	呉春	呉春「呉春」（朱文連印）	中（横）	呉春山水画譜後編（明治26年）
	田舎夕陽之図	呉春	呉春「呉春」（朱文連印）	中（横）	呉春山水画譜後編（明治26年）
	蘆に鷺之図	狩野常信	常信筆「常信」（朱文壺印）	中（縦）	常信花鳥画譜前編（明治26年）
	魚狗に番華之図	狩野常信	常信筆「狩野」（朱文方印）「常信」（朱文方印）	中（縦）	常信花鳥画譜前編（明治26年）
	沼邊孤村之図	呉春	呉春「呉春」（朱文連印）	中（横）	呉春山水画譜後編（明治26年）
	柳塘遊鷺之図	呉春	呉春「呉春」（朱文連印）	中（横）	呉春山水画譜後編（明治26年）
	柏に鴟鵂之図	狩野常信	常信筆「常信」（朱文瓢印）	中（縦）	常信花鳥画譜前編（明治26年）
第五扇	雨中山水之図		擬本山／天明辛丑仲冬／空前ニ司寫於雪齋／日東謝寅「長庚」（陰陽文方印）「春星」（陰陽文方印）	柱	中古諸名家画譜（明治26年）
	扁柏に鷹之図	円山応挙	天明戊辰初冬寫／應挙「應挙之印」（白文方印）「仲選」（白文方印）	柱	中古諸名家画譜（明治26年）
	月下砧図	呉春	呉春「呉春」（白文連印）	大	—
第六扇	弱蘆劔葉に秋鷄之図	狩野常信	常信筆「常信」（朱文瓢印）	中（縦）	常信花鳥画譜前編（明治26年）
	竹林詩屋之図	呉春	呉春「呉春」（朱文連印）	中（横）	呉春山水画譜後編（明治26年）
	鶴に蘆	松村景文	景文「景文印」（白文方印）	中（横）	景文花鳥画譜後編（明治25年）
	牡丹に山鳥撫雛之図	狩野常信	常信筆「常信」（朱文壺印）	中（縦）	常信花鳥画譜前編（明治26年）
	雪枝に秦吉了之図	狩野常信	常信筆「常信」（朱文瓢印）	中（縦）	常信花鳥画譜前編（明治26年）
	冨襲騷樹之図	呉春	呉春「呉春」（朱文連印）	中（横）	呉春山水画譜後編（明治26年）
	山村晴雪之図	呉春	呉春「呉春」（朱文連印）	中（縦）	呉春山水画譜後編（明治26年）
	秋山帰雁之図	狩野常信	常信筆「常信」（朱文壺印）	中（横）	常信花鳥画譜前編（明治26年）

※画題は嵩山堂目録の表記を参照した。

※所収の画譜の出版年は、本文中で示した青木嵩山堂版の出版年を記した。

なる異版が複数存在する。国立国会図書館本（以下、国会本）の嵩山堂発行の本図には「月斎摸古」（朱文長方印）、本屏風の本図には「景文印」（白文方印）、芸艸堂の奥付がある本図に「景文」（朱文長方印）があるのを確認している。

次に、「狩野常信花鳥画譜」は、明治二十六年（一八九三）から翌年にかけて前編、後編、続編が出版された。嵩山堂目録には「實價金四十錢 郵税二錢」とある。国会本とハンブルク美術工芸博物館本（以下、ハンブルク本）を確認しており、本屏風には前編の十二図全てが貼付されている。国会本もハンブルク本も嵩山堂版であるが、印章が異なる異版が複数存在する。例えば、本屏風第二扇の「春谿雄雉之図」には「狩野」（朱文方印）「常信」（朱文方印）の印があり、国会本の本図は「常信」（朱文瓢印）、ハンブルク本には「常信」（朱文壺印）の印章がある。また、第六扇の「秋山帰雁之図」は、国会本とハンブルク本は右下に印章があるのに対し、国会本は左下といった違いが見られる。

「呉春山水画譜」は明治二十五年に前編、翌年に後編が出版され、売価は「狩野常信花鳥画譜」と同様である。国会本を確認しており、本屏風には後編の十二図のうち「春山满月之図」以外の十一図が貼付されている。本屏風も国会本も印章は全て「呉春」（朱文連印）である。

「中古諸名家画譜」は嵩山堂目録に「美麗彩色入大形全六枚」とある通り、先述の三つの画譜より大きな判型で六枚一組となっており、六図全てが本屏風に貼付されている。売価は「狩野常信花鳥画譜」「呉春山水画譜」と同様である。明治二十六年に出版されており、筑波大学附属

図書館に二組所蔵されている。いずれも嵩山堂版であるが、六図のうち「藤花に群雀之図」「花卉に蝶之図」「扁柏に鷹之図」の三図は本屏風と印章が異なり、それぞれ「魚」（朱文水形印）、「景文」（朱文長方印）、「応挙之印」（白文方印）が確認できる。

以上、本屏風に貼付されている木版画について、現存する美術画譜を踏まえながら概観した。

なお、本屏風第一扇に貼付された芦雪の署名と印章がある「藤花に群雀之図」については、原画と見られる肉筆画、小津与右衛門旧蔵の「紫藤群雀図」^③の存在を指摘しておきたい。本屏風の図はこれに図様が近似し、印章の文字も「長澤」「魚」（朱文楕円連印）で共通している。ただし、一般的に木版画に見られる印章は、肉筆画に捺された印章などを木版で模刻して摺られるため、真印の印影とは異なる。印章だけを手掛かりに原画の同定はできないため図様のさらなる比較検討が必要だが、同じ嵩山堂版の美術画譜でも異版が複数存在し、再版が繰り返されたことは確かだろう。

（二）摸古美術画

美術画譜とは別に、本屏風の第一・三・五扇には大型の木版画が一枚ずつ貼付されている。これは嵩山堂目録に「優美高尚 摸古美術画広告」とある、室内装飾用に軸装や額装を施して販売された木版画である。掛軸に仕立てる場合は「一枚二付二十錢 郵税三枚迄二錢」、掛額の場合は「一枚二付十五錢 郵税四枚迄二錢」であった。紹介文には

「此れ「古今大家の真筆」を得る数千金を費しても尚得難し（中略）今や幸に豪商社寺の秘藏珍重せらるる什宝を写す事を得てここに発売す（一）」「内筆者」とあり、摸古美術画の需要と制作の経緯がうかがえる。

本屏風の第一扇・第三扇にそれぞれ貼付されている図は、高山堂目録で「四季花鳥之図」と題された四図のうちの「秋之部」「冬之部」にあたる。「四季花鳥之図」は、「春之部」を鈴木松年（一八四八〜一九一八）、「夏之部」を幸野棟嶺（一八四四〜九五）、「秋之部」を望月玉泉、「冬之部」を今尾景年が担当した。現存作品のうち、美術画譜のようにタイトルや奥書がある作例は管見の限り見当たらないが、高山堂目録に掲載された「秋之部」「冬之部」の解説文が本屏風の図様と一致する。出版時期についても未詳だが、後に出版された芸艸堂目録⁴⁾に「四大画伯に乞ひ其各得意とせらるる花鳥図を四季に特筆せられたるを上木して弘く江湖の需めに應ぜんとす」の一文が見られる。四名の著名絵師に依頼して特別に絵を描いてもらったことから判断すると、棟嶺の没年である明治二十八年（一八九五）が下限と考えられ、美術画譜とほぼ同時期に出版されたものと見られる。

次に、本屏風の第五扇に貼付された木版画は、明治三十二年（一八九九）の高山堂目録に「山水之部」「呉春月下砧之図」として挿図入りで紹介されている摸古美術画と見られる。逸翁美術館所蔵の重要美術品「砧図（秋夜擣衣図）」（以下、逸翁本）と同じテーマで、図様も一見よく似ているが、茅屋の窓の位置、庭先の樹木の本数等、本屏風の本図と逸翁本では表現の違いが見られる。印章も、本屏風は絵の左下に「呉

春」（白文連印）があるのに対し、逸翁本は右下に「呉春之印」（白文方印）が捺されている。高山堂目録の挿図も印章は絵の左下にあることから、逸翁本とは別の原画の存在も考えられる。管見の限り、本図木版画は、本屏風以外の作例を確認できない。

五 おわりに

以上、本屏風の木版画について、高山堂で出版された木版画を踏まえて概観した。明治二十五、六年に制作された美術画譜と、明治二十八年までに制作されたと見られる摸古美術画が貼り交ぜられているため、本屏風が仕立てられた時期はそれ以降となる。具体的な制作時期や制作動機は不明であるが、想像をたくましくするならば、当時の富裕層や好事家が高山堂の美術画譜と摸古美術画を入手し、これらを一目で鑑賞できるように屏風に仕立てたとも考えられる。いずれにせよ、本屏風は、当時の木版技術を用いた美術画の役割と、それらがどのように消費されたかを示す貴重な実例といえる。

また、肉筆画の木版複製画については、先行研究で東京の版元の例を挙げ「明治三十年代頃から肉筆画に重点を置いて複製を行った者たちもみられる。（中略）海外輸出向けの肉筆複製を、同じころに開始して相当量が海外に渡ったのであった。」⁵⁾と指摘されている。今後は、本稿で取り上げなかった他の美術画譜や摸古美術画、原画となった肉筆作品の調査を進めながら、海外輸出品なども含めた木版複製画の役割や、需要

の背景、制作状況等についても検討していきたい。

【付記】

本稿を作成するにあたり、福田美術館学芸課長の岡田秀之氏、美術書出版株式会社芸艸堂の早光照子氏、佐藤木版画工房摺師の平井恭子氏に多大なるご教示を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

註(1) 嵩山堂については、青木育志・青木俊造『青木嵩山堂 明治期の総合出版社』（一般財団法人アジア・ユーラシア総合研究所、二〇一七年）が詳しい。

(2) 本稿では特に表記しない限り、嵩山堂目録の引用は百三十八号（明治三十六年発行）を典拠とした。

(3) 『美術画報』初編卷三（画報社、一八九四年）に、小津与右衛門氏所蔵「紫藤群雀図」の図版と解説文が掲載されている。

(4) 『美術図書目録 第十七回』（大正二年発行）
(5) 永田生慈『資料による近代浮世絵事情』第二章「明治中期から末期頃 版元・売買・蒐集家と研究」五「複製画の出版」、八十九頁（三彩社、一九九二年）。

（公益財団法人正木美術館学芸員）